

令和3年度 連携研究スキームによる研究（政策研連携研究課題）
評価報告書

研 究 テ ー マ 名	農福連携の地域経済・社会、障害者の心体への効果に関する研究
政策研連携研究課題名	農福連携の取組の地域経済・社会への効果と効果的な発揮に関する研究
研 究 実 施 期 間	令和2年度～令和4年度
研 究 の 概 要	① 長野県の「農業就労チャレンジ事業」（いわゆるマッチング事業）に参加した農業者及び社会福祉事業所等を対象にアンケート調査を実施し、効果と課題を分析するとともに、（一社）日本農福連携協会が農福連携に取り組む福祉事業所を対象に実施した「新型コロナウイルス影響調査アンケート」について、追加分析を行った。 その結果、農作業を依頼する農業側では、人手不足の解消につながり事業に対する評価が高いこと、障害者を受け入れる際のスケジュール調整や農作業技術習得等が課題となっていることが明らかになった。 他方、農作業を請け負う福祉側では、農業活動による障害者への好影響や収益面でのメリットにより取り組んでいるものの、農業活動に取り組む職員らの人員確保が課題となっていることが明らかになった。 また、同事業によって農業サイドと福祉サイドが連携した取組も生じており、地域での農福連携の深化が期待される点も明らかとなった。 ② 農福連携の取組みを飛躍的に普及・拡大させる原動力になると考えられる農協の取組に着目し、農作業請負の仲介を行う2つの農協、農作業請負の依頼を行う1つの農協、障害者の雇用を行う2つの農協の事例分析を行った。 その結果、農業労働力不足解消、安定した雇用創出による地域社会への貢献など、農協の強みを活かした効果を示しつつ、農協が農福連携に取り組む意義が明らかになった。 ③ 農福連携の成功事例の横展開による地域経済・社会への影響について、特に、暖簾分けのような形で同一主体による横展開が行われている事例を中心に調査を

	行い、その特色、効果、課題等を検討した。 その結果、横展開により所属する障害者の人数、支援する職員の人件、作付面積や飼養羽数等が増加するだけでなく、複数事業所による共同出荷、農産物の加工販売等における事業所間連携、連携による自然循環型農業の構築といった有機的な事業所間の結びつきによる相乗効果があることが確認された。 ④ 農福連携技術支援者（農業版JC）の役割に関する研究では、農林水産省の研修に係るプログラムとJEEDの研修カリキュラムとの比較を通じ、農業版JCの役割を明らかにした。この成果は日本職業リハビリテーション学会にて口頭報告した。 ⑤ 企業向け農園等を活用した障害者雇用支援サービスの経済的位置付けに関する研究では、企業向け農園等を活用した障害者雇用支援サービスは4つに類型できることなどを明らかにした。この成果は日本農業経済学会で口頭報告した後、報告論文の投稿を予定している。
評 価 結 果 ○ 評価委員会名及び開催日 連携研究スキームによる研究 研究テーマ「農福連携の地域経済・社会、障害者の心体への効果に関する研究」外部評価委員会 令和3年3月書面審査 ○ 評価委員名 安藤 光義 委員 （東京大学大学院農学生命科学研究科・教授） 川手 督也 委員 （日本大学生物資源科学部・教授） 茂野 隆一 委員 （筑波大学生命環境系・教授） ○ 評価基準	【評価項目ごとの評価】（ ）内は3名の委員の投票数を示す。 ○ 社会的ニーズへの対応 S：非常に大きな意義がある（3） ○ 政策研究と連携して研究することによる政策研究への示唆の評価 S：非常に多くの示唆が見込める（2） A：多くの示唆が見込める（1） ○ 学術面からみた研究成果の評価 A：学術的に高く評価できる（2） B：学術的に評価できる（1） ○ 研究計画の妥当性 A：妥当である（3） ○ 研究資源・実施体制の妥当性 A：妥当である（3） ○ 研究目標の達成度（達成可能性） A：達成度は高い（3） 【総合評価】（ ）内は3名の委員の投票数を示す。 1. 順調に進行しており、問題はない（3） 【評価委員からの主な意見】 ○ 農福連携に関する社会科学的な研究は社会的ニーズが

・社会的ニーズへの対応 - S.非常に大きな意義がある - A.大きな意義がある - B.意義がある - C.意義が小さい - D.意義は見出しがたい ・政策の企画・立案への貢献 - S.非常に大きな貢献が見込める - A.大きな貢献が見込める - B.貢献が見込める - C.貢献が小さい - D.貢献は見込みがたい ・学術面からみた研究成果の評価 - S.学術的に非常に高く評価できる - A.学術的に高く評価できる - B.学術的に評価できる - C.学術的な評価はやや低い - D.学術的評価は低い ・研究計画の妥当性 - S.非常によい - A.妥当である - B.概ね妥当である - C.やや妥当でない - D.妥当ではない ・研究資源・実施体制の妥当性 - S.非常に良い - A.妥当である - B.概ね妥当である - C.やや妥当でない - D.見直しが必要である ・研究目標の達成度 - S.達成度は非常に高い - A.達成度は高い - B.概ね達成している - C.達成度はやや低い	きわめて大きいにも関わらず、関連する研究はきわめて少ない。同時に農業に関する基本的な認識の部分からの再検討が必要となり、研究面でパラダイム転換につながる可能性を有していると言える。研究成果は、政策面において大きな貢献をもたらすことが期待されている。 ○コロナ禍にも関わらず、精力的に調査・分析を進めて注目に値する成果を出している点は、高く評価される。これまでの長年にわたる研究で築いてきた現地との信頼関係がものを言ったということではないだろうか。今後も引き続き、農福連携の実践者の方々との繋がりを大切にし、そのネットワークを拡大しながら、この研究を継続されることを期待する。 ○農協における農福連携の取り組みが期待されるほどには進んでない中で、先導的な農協の取り組み事例を紹介することは、農福連携の推進にとって非常に有意義なことだと考える。 ○農福連携の「横展開」の事例についても、農福連携に取り組む組織が今後の方向性を考える上で非常に参考になるものと思う。 ○学会だけではなくセミナー等にも積極的に出席し、活発なアウトリーチ活動を行っていることは高く評価できる。 ○農福連携の様々な効果の解明に取り組んでいるが、一口に効果と言っても、障がい者の雇用・就労と障がい者の心身への効果、農業経営に及ぼす効果、さらには地域に及ぼす効果は一様ではない。それぞれを明確に区別しながら、それぞれの効果の解明を行い、ついで相互の関連性の分析を試みて頂くことを期待したい。 ○現在進めている先進的取り組みの精緻なケーススタディをさらに深化させ、経済性のみならず社会性を経営戦略に組み込んで経営成果を出している先進的経営としてとらえ直し、そこから新たなビジネスモデルの解明を試みた上で、農福連携の効果の問題にアプローチすることを期待したい。 ○今後は、農福連携に求められる人材の育成・確保に関する研究、農福連携に取り組むリーダーの方々の価値観やライフコースに関する研究などが課題となるように思う。
--	---

D.達成度は低い ・総合評価 1.順調に進行しており、問題ない 2.ほぼ順調であるが、改善の余地がある 3.計画等を変更する必要がある 4.中止すべきである	
今 後 の 対 応 方 針	これまでの成果や事例調査を踏まえ、更なる調査分析及び考察を深める。 また、農業関係者、福祉関係者、委託先、大学等の研究機関、行政機関等を巻き込み、3年間の研究成果を含め広く農福連携について発信する方法を検討する。 さらに、3年間の研究を踏まえ、今後の農福連携研究の進め方を検討する。